

道の駅『みま』コスモス館は、 “豊かな自然と人々のふれあいを 感じられる”そんなところですよ。

三間町の観光、自然について



三間町は美しい沼の多い地方で、水沼が転じて『三間』という地名になったといわれ、美沼の里とも呼ばれており、町内を流れる三間川は四万十川の支流の一つで、三間盆地を形成し水田地帯になっています。

かつては吉田藩の穀倉地帯で土壌・

水・気候に恵まれ、美味しい『三間米』の産地として知られております。

町内には、約250年の歴史を持つ旧吉田藩庄屋・毛利家屋敷があり、地域住民有志による『毛利家を守る会』によって保存・維持されております。また、四



国霊場四十一番札所龍光寺と四十二番札所仏木寺の二つの札所がある町で、中山池自然公園の周りや県道沿いの花街道は地元住民が主体となって、夏はポーチュラカ、秋はコスモス、冬に植えたチューリップが春には花を咲かせて、訪れた人や道行くお遍路さんやドライバーの目を癒し楽しませております。

どんな施設がある？

当駅には、畦地梅太郎記念美術館、井関邦三郎記念館、物産館や農産物直売所、レストラン、ジャコ天実演販売コーナー、レンタサイクル等があります。当駅の目玉の一つは畦地梅太郎記念美術館で、日本を代表する版画家故畦地梅太郎画伯の作品を中心に展示し、梅

太郎の創作活動の多面性、ふるさと三間町との関係を紹介し、人間・畦地梅太郎の原点に触れる展示空間を創出しております。

もう一つは井関邦三郎記念館で、総合農機メーカーの創業者井関邦三郎の農機具にかけた人生の軌跡に触れていただくことができます。邦三郎が「農業に携わる人々を過酷な労働から開放したい」という強い信念で開発した農機具も展示しております。



道の駅「みま」
コスモス館
取締役支配人
清水 実昭

(愛媛県宇和島市三間町)



差別化を図るための取組み



現在当駅は、国道沿いでないため交通量は少なく商圏人口が限られており、客数の増加は来店頻度の向上しかないと考え、新規顧客の獲得よりも既存の顧客の来店頻度を高めることに重点を置き、こだわりを持った商品構成と魅力あふれる商品の品揃えを図り、さらに農家の方々による「安心・安全・安価」の朝採り新鮮野菜の販売に努めるとともに、いつ来店されても気持ちの良い接客サービスを提供することを一番に考えております。

また、オリジナル商品としては開業当初に「何かうちだけのものを」ということで、町内に造り酒屋があることから一番に「酒だ！」と考え、名前は三間町の町花で、かつコスモス館にちなみ「コスモスのさ、やき」と命名いたしました。おかげで当駅でも人気商品の一つになっております。

さらに、野菜を販売するなら「野菜にはドレッシング」と考え、以前は三間町が玉ねぎの指定産地だったことから、三間町産玉ねぎを使った「たま



ねぎドレッシング」を商品化し、販売以来非常に好評を得て店頭だけでなく78の小袋入りを作り、宇和島市内の学校給食に使用して頂いております。

人気の農家レストラン

当駅には、地元農家女性グループが運営するレストラン『畦みちの花』があります。そこでは皆が自分のところで作った野菜を持ち寄って地産地消を基本に、毎日、三間らしさ、農村らしさを生かした昼食バイキングを「安全・安心・美味しく」をモットーに、手作りの「おふくろの味」を提供しております。「勇気・やる気・元気」を持つて活動し、平成20年度には、農林水産省の農山漁村いきいきシニア活動表彰の農村地域部門で優秀賞を受賞いたしました。

お陰さまで、土・日にはたくさんさんの家族連れで賑わいを見せております。



これからに期待すること

平成23年度中には、西予市から宇和島市までの高速道路が開通し、三間インターチエッジ（仮称）が誕生します。当駅は、その

インターチェンジを降りてすぐのところにある「道の駅」ということになりました。自然を求め「最後の清流四万十川」を目指す観光客や四万十川流域への周遊ルートのための新たな玄関口として、さらに高速道路のサービスエリアとしての役割を持つ「道の駅」にならなければならないと思っております。

そして今、我々が取り組むべきこと

現在、国の観光立国の実現に関する諸施策で、広域での観光圏の整備を進めているように、広域周遊型・長期滞在型の観光に対するニーズが増えており、これからは、個々の地域の魅力だけでなく、それらを繋いで地域全体で多様な魅力を持った観光エリアであることがアピールして集客力を高めることが最重点課題だと考えております。

そこで私達は、地域の観光および情報発信の拠点となるために近隣の「道の駅」が連携し、その地域の観光施設と協力することで、南予といえはこれまで注目度・知名度が高くなかった「点」と「点」の観光拠点を「線」として繋ぎ、さらに、それを「面」へと広がりを持たせた地域にすることで広いエリアで旅行者を周遊させることができ、知名度の向上を図ることができるのではないかと考え、まずは第一段階として「道の駅」同士の連携を進めております。